

法遍寺 から大切な 皆様へ

2024年4月1日

日蓮正宗 年間方針

折伏前進の年

法遍寺・天晴寺支部活動方針

講中一結・万難を排して

折伏実践

年間実践テーマ

① 勤行・唱題で歡喜の活動

根本を欠かさず家族

そろって弛まず実践

② 講中一結して折伏実践

「異体同心」・「師弟相對」

の信心で

広宣流布に邁進

③ 支部総登山と寺院参詣
で人材育成

死身弘法の決意と歡喜

の生活・切磋琢磨

しながら家庭訪問

〒488-0881

愛知県尾張旭市城山町三ツ池6075-1

(電話番号：0561-54-9226)

相談無料 <https://hohenji.net/>

2024年3月10日 御報恩御講の様子



慧光山 法遍寺(えこうざん ほうへんじ)について 住職 近藤道正

法遍寺は、静岡県富士宮市にある「多宝富士大日蓮華山大石寺」を総本山とする日蓮正宗の寺院です。日蓮大聖人様の正しき信仰を人々に弘め、ここ愛知地域の全ての人々が真の幸せをつかむ為に、総本山第67世日頭上人が開基となって、昭和57年6月18日法遍院として設立され、平成20年12月23日には改築され、法遍寺となりました。日蓮大聖人様の出世の本懐である三大秘法の大御本尊に帰依(きえ)し、破邪顕正の布教活動をさせていただいております。

① 講中のみなさまへ「他界された方への真心は妙法により運ばれる」

誰もがその胸に、他界された方へ届けたい心を持つ。大聖人は、妙心尼の亡き夫への追慕の情と、亡き夫からこの世に残してきた妻子への思いをつなぐ絆を中国の故事で例えた。ある夫が妻とやむなく離別の際、鏡を二つに割り、片方の鏡に自分の心を託して妻に与えた。すると妻の持つその鏡が鵲(カササギ)と化して飛び、妻の日常を夫に伝えた。またある武将が幽閉にあった際、故郷の妻子を思い、雁(かり)の足に手紙をつけて放ち、それが家臣の元に届き十九年を経て帰郷に導かれた。これらの鳥と同じように、妙心尼が常に唱えている題目は死の世界にいる夫への使いとなり、妙の文字が文殊・普賢などの菩薩と変現し、妙心尼の心は届けられ夫は慰められていると仰せになった(御書1119)。生と死の世界を繋ぐのは妙法の題目なのである。妙の不思議さ、妙法の徳を信じ切り唱題に励もう。

② 創価学会に籍を置くみなさまへ(創価学会破門の経緯を知ろう その44)

前号に続き、「創価学会破門通告書」の「第五の(二)」を掲載。さらに、昭和四十九年六月十八日付の「北条文書」には、「宗門の件」として、「長期的に見れば、うまくわかれる以外にないと思う。(中略)やる時がきたら、徹底的に斗いたいと思います。」と、宗門から独立せんとする謀計が記されております。これらの学会内部文書から判るように、要するに、創価学会では、当時、「学会が主、宗門が従」という傲慢な考えから、実際に宗門を公明党や創価大学などと同様の外郭団体として、創価学会の支配下に置か、それができなければ日蓮正宗から独立しようという、謀略を廻らしていたのであります。

昭和五十四年十一月、この文書が明るみに出たとき、当時の創価学会の責任者が総本山へ登山し、「今後は、宗門の永遠の上において、宗門をお護り申し上げ、かかる誤りというものを、今後、行なうことはもちろん、考えることも絶対がない」と深く陳謝し誓ったのであります。

そのため、ひとたびは、法主としての慈悲の上から、これを信じて許すとともに、多くの僧侶に対しても、この旨を述べた上で、「もちろん、今後も、もしもそのような兆候が万が一にでもあれば、直ちに、その団体乃至その責任者に対して、どこまでもその誤りを糾し、そしてそれを改めざる限りにおいては、はっきりとした処置というものも考えていかなければなりません」と、再びこのような問題が起こったときの宗門の対処についても、明確に示したのであります。(次号に続く。「正しい宗教」の項はしばらくお休み致します)